

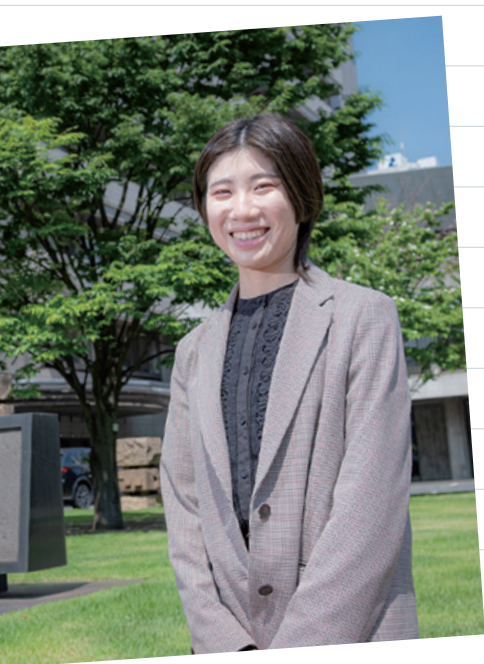


Interview

あの人が
他言語を
学ぶ理由



「言葉」のカギで開く扉、
その向こうにあるもの



他者や異なる文化を知る、
キャリアを広げる、選択肢を得る、
自分に気づく…。
他言語を習得することで
世界につながる「扉」を開けた人たちは、
扉の向こうに
どのような景色を見たのでしょうか。
異なる動機から他言語を学んだ
6名のストーリーをお届けします。



「あなた」をほんの少し知りたい。
その言葉を待っている人がいた



#学びのキッカケ

海外のお客様との会話を深められないことにジレンマを感じた。

#変化・気づき

「今日は何してた？」あなたを知りたい気持ちが伝わり、友達に。

#楽しさ・喜び

少し気になったことを聞いてみると、その人の素顔が見える瞬間。

バリスタ KIELO COFFEE 店長
鈴木美樹さん

専門学校でバリスタの技術を学び、卒業後はコーヒーの輸入・販売を行う会社に就職。2021年、「孤独の解消」をビジョンに掲げるKIELO COFFEE(秋葉原)に転職し、店長に。

「あと一步」が聞けない もどかしさが学びを後押し

もし私の仕事を「接客してコーヒーをお出しすること」だと考えるなら、わざわざ英語を学ぼうとは思わなかったかもしれません。スペシャルティコーヒーを提供するこのお店で働き始めたのは、2年前のこと。秋葉原に近い土地

柄、お店には海外からのお客様がたくさんいらっしゃいます。もともと英語は苦手でしたが、メニューを指差しながら最低限のやりとりをする程度なら私にもできました。

ところが、次第にジレンマを感じるようになりました。私たちのお店では、孤独を感じやすい社会のなかで、接客する側・される側のドライな関係を超えて、まるで友達のようなつな

取材・文／塚田智恵美 撮影／吉永智彦



KIELO COFFEEを訪れたお客様と。何気ない会話を楽しみに何度も訪れて、親しくなる方が多いという。会話からそれぞれに異なるバックボーンを知ると「海外からのお客様」とは一括りにできない」と鈴木さん(写真は本人提供)。

がりをお客様と築くことを目指しています。でも、あと一步コミュニケーションを深めたいところで、いつも言葉の壁が立ちはだかる。もし相手が友達なら「昨日はどこか観光に行った?」などと自然に聞きたら、その一言が出ない。たとえ聞けても、相手から返ってくる言葉が聞き取れないから、そのあとの会話が続きません。

お客様と友達になることを目指すのなら、「ちょっとした友達同士の会話」ができるくらいには英語を話せるようになりたい。そんな気持ちが芽生えたものの、初めのころは英語学習の本を買うだけで満足し、身につかない日々が続きました。そこで「明日からお店で使えるような、日常的な話し方や表現を学ぼう」と考え、英語圏のユーチューバーの雑談動画を見たり、「めっちゃ〜だね」「マジで?」など日常会話でよく出てくるような言い回しを学んだりす

ることに。覚えた表現をお店で使ってみて「これは伝わらないんだ」と学ぶことも。とにかく実践を重ねました。

学習本の外には英語の「正解」がたくさんある

せっかくの出会いをただ流すのではなく、2言、3言の会話のなかからでも“あなたという人間”を少し知ってみたい。そんな気持ちが、私の根っこにあったのかもしれません。英語という言葉を得ることで、海外の方とも一步踏み込んだ会話ができるようになりました。無難に接客をするだけなら必要のない、ちょっとした相手への興味——例えば漢字Tシャツを着ている方がいたら「なんでその漢字を選んだんだろう?」、日本のアニメのグッズを持っている方がいたら「この人、アニメが好きなのかな?」といったことを、聞けるようになった。す

ると、ちょっとした会話のラリーから、その人の素顔が見えるような瞬間があるのです。

そしてわかったのは、日本人と話したくて仕方がないとうずうずしている外国人がとても多いこと。シャイな人も多い日本人から街中で話しかけられることはほとんどなく、ホテルや観光地でも事務的な会話にとどまることが多いのでしょうか。だから、私が拙い英語で「今日は何してたの?」と“あなたについて”問いかけるだけで、待ってましたと言わんばかりの勢いで、お話をしてくれる方がたくさんいました。

お店のクチコミに、海外の方が「ここには英語で話せるミキがいるよ」と書いてくれたこともありました。私のような拙い英語で「話せる」と言っているのかしら、と照れましたが、たとえ片言でも「話そう」とする姿勢が伝わったのかもしれない。

気づいたら英語での会話が少しずつ続くようになって、日本に滞在している間は毎日お店におしゃべりしに来てくれる方や、一緒にご飯

を食べに行くほど仲良くなった方もいました。一歩深く関わろうと試行錯誤しているうちに、本当に「友達」になれたのです。

だいぶ英語を話せるようになってから、英語学習の本を改めて開いたとき、「注文するときの正しい英語はどれでしょう?」という問題を見つけました。選択肢を見て「あれ?」と思った。私は海外の方から毎日英語で注文を受けているのに、その問題の正解がわからなかったのです。むしろ、そこに書かれている選択肢はどれも、実際に使う表現とは微妙に異なるように見えました。考えてみれば、人によって、よく使う言葉や省略する言葉、訛りや言い方は異なるもの。人も、言葉も、それぞれ違って、生きている。学習本はあくまでも基礎であって、その外には人の数だけ英語の「正解」がたくさんある。そう思うと私は一層、さまざまな人と出会い、友達になることが面白く感じられるのです。





椎茸の海外市場を切り拓き
地元の生産者を笑顔に

#学びのキッカケ

海外の人に椎茸をPRするにあたり、英語の必要性を痛感。

#変化・気づき

商品の魅力を効果的に伝えられ、地元の活性化につながる。

#楽しさ・喜び

実践で試行錯誤するなかで、相手に響くキーワードが見えてくる。

椎茸問屋 (株)杉本商店 代表取締役社長
杉本和英さん

大学卒業後、関東でアパレル業に従事。2011年に宮崎県高千穂町に帰郷し、家業の椎茸問屋「杉本商店」に入る。現在、代表取締役社長。22年GFP(農林水産物・食品輸出プロジェクト)アンバサダー認定。

取材・文／藤崎雅子 撮影／姉川友香

生産者の暮らしを守るため 海外進出を決断

杉本商店は祖父の代から続く干し椎茸問屋です。地元の生産者さん約600件から、森林の中で原木栽培された良質な椎茸を買い取り、世界に販売しています。

海外進出を考え始めたのは2016年ごろ。国内需要が縮小するなか、同じ量を売り続けようとすると価格を下げるしかありません。しかし、それは絶対にやってはだめなんです。なぜなら、そうすると馴染みの生産者さんからの買い取り価格も下げざるを得ず、彼らの暮らしを守ることができなくなるからです。

1円でも高く買ってくれるところを見つけようと、目を向けたのが海外です。世界の人口

は増加しているから、いずれ食糧不足になり、安全で健康に良い食品は奪い合いになるのではないかと。そう仮説を立て、世界中の富裕層に買ってもらおうと考えました。

コミュニケーションを広げる 英語の必要性を痛感

海外進出にあたってさまざまな施策を行ってきました。その一つは海外の食品展示会への出展です。現地には僕が行かざるを得ないんですが、僕の英語はひどいもので、平気で動詞を3つ並べちゃうレベル。まあそれでもなんとかなるんですよ。聞かれるのは椎茸のことだけで、誰も「国際情勢についてどう思うか」なんて聞いたりしませんから。

とはいえ、やっぱり英語は大事です。世界



インドの巨大市場をにらみ、在インド日本国大使館にて椎茸の魅力を伝える杉本さん（写真は杉本商店提供）。

中どこへ行っても英語は通じます。英語をその他の言語にする部分は自動翻訳に任せるにしても、まずは英語で伝えることができるだけで、コミュニケーションの対象は一気に広がります。

その重要性に40歳を過ぎて気づき、オンライン英会話スクールで勉強を始めました。最初のころは毎日レッスンを受け、苦戦していた文法の勉強には途中で見切りをつけました。実践ではぶっちゃけ文法なんてどうでもいいんですよ。ちゃんと伝えたいことがあれば、相手は聞く耳を立てて聞いてくれますから。それより、黙り込まないようにするのが大事です。使わないと言葉が出てこなくなるので、今も週一ペースでレッスンを続けています。

刺さる言葉でつなく 「驚き」と「感動」が心を動かす

相変わらず今もひどい英語です。それでも、自分たちの商品は、自分たちで伝えなければと思っています。重要なのは、英語を話すことではなく、何を伝えるかという本質。ガチャガチャな文法だけど、一生懸命話していると、商品の魅力は伝わるんです。通訳を介したら、たぶん半分ぐらいしか伝わらないでしょうね。

今の時代、人の心を動かすには、「驚き」と「感動」しかないと思います。僕は年に何回も、

アメリカやドバイ、インドなど海外の展示会やイベントに行きますが、いつも椎茸のかぶり物を着用します。周りのブースでは雛壇に商品をきれいに陳列しているなか、うちは椎茸栽培する光景の写真がドーンとあって、その前に椎茸を被った僕が立っている。みんな立ち止まって写真を撮りだします。そこですかさず椎茸を試食してもらおうと、「わあすごい」「こんなものがあったのか!」といとも簡単にお財布を開けるんですよ。つまり、かぶり物は「驚き」、試食の椎茸は「感動」を与えるんです。

その「驚き」と「感動」をつなぐのが、「言葉」ではないでしょうか。最初はどう説明するといいかわからないんですが、トライ&エラーを繰り返すなかで、やけに“刺さる”キーワードが出てくるんです。例えば、椎茸の英語表現は「Japanese shiitake mushroom」から「forest-grown mushroom」に変えました。森林で育った椎茸の魅力が、ストーリーとして刺さることを現場で感じたからです。

今、21カ国に輸出するようになりました。国内の落ち込みを海外で補い、生産者さんから変わらず買い取ることができています。生産者さんは「そうか、俺が作った椎茸が海を渡ったか」とめっちゃくちゃ喜んでくれています。今後も「安心して生産してくださいね」と言っていきたいですね。

#学びのキッカケ

日本語圏にとどまっていたのはキャリアが頭打ちになるとの危機感。

#変化・気づき

共通言語をもつだけでは不足。伝える努力の大切さを痛感。

#楽しさ・喜び

キャリアの選択の幅が広がり、安心感につながった。

将来の危機感から英語環境に突入。
相手の意を汲む努力こそ大切と知る

エンジニア (株)マネーフォワード 西村由佳里さん

小学生のころ自作PCに夢中になりエンジニアの道へ。2019年、家計簿アプリなどを手がける(株)マネーフォワードに転職。21年、職場の完全英語化を先行実施するチームへ異動。現在も英語環境で活躍中。

日本語圏でのキャリアへの 閉塞感から英語漬けの環境へ

日本のウェブサービス会社でエンジニアをしています。チームの公用語は英語で、多くの海外出身者と共に働いています。

私は日本生まれ日本育ち。学生時代は英語が得意でなく、特に興味もありませんでした。意識が変わったのは、転職活動でいろいろ企業研究をしたとき。長く活躍している女性エンジニアの多くが外資系企業在籍であると気づき、「女性として、

このまま日本語圏にとどまっていたら私のキャリアはいつか頭打ちになるかもしれない」との危機感から、英語の勉強を始めました。ただし転職後、「女性として」という考えは打ち消されることに…。

転職先である今の会社は、会社の急成長によってエンジニア不足が深刻化するなか、早くからベトナム人を「日本語を話せる」という条件で採用していました。21年には「日本語」の条件を撤廃し、世界中からの人材獲得に乗り出しています。それに伴い、24年度中の開発部門全体の公用語英語化を掲げ、英語化実践組織を段階的に

取材・文／藤崎雅子 撮影／吉永智彦

広げている最中。

うちの会社に限らず、海外採用の拡大によって多様な国籍の人がチームとなる職場は増えていくでしょう。もはや男女関係なく、これからのエンジニアには英語力が必要なのでは。そう考え、英語の勉強に一層力が入るようになりました。

21年秋、英語化の第一歩として先行実施チームが発足することになり、「チャンス!」と飛びつきました。それまでも英語を使う仕事は積極的に取りにいていましたが、より厳しい環境で自分を鍛えたいと思ったからです。

会議はもちろん、相談やチャットのやりとりなど、仕事上のコミュニケーションはほぼ英語だけ。そこで経験を積んできたことは、キャリアに対する安心感に。定年まで同じ会社とは限らない時代、未来の選択の幅が確実に広がった思いです。

平易な英語でいい。 正確さより、伝える努力が必要

誤解しないでほしいのですが、私たちは職場で、ネイティブのような流暢さや、美しい表現が求められているわけではありません。社内で推奨されているのは、シンプルな英語「グロービッシュ」。海外にも英語を第一言語としない人は多いので、必要なことを平易な表現でわかりやすく伝えること



同じチームで働くベトナム人のエンジニアと。「非ネイティブ同士が意思疎通するための英語として、発音や文法の正しさは重要ではない」

が重要なのです。

最近、中高生時代の愛読書『十二国記』*の中に、何度も読み返すシーンがあります。言葉の通じない国に迷い込んだ少女が魔法のような力で言葉を獲得したとき、こんな忠告を受けます。「言葉が通じるからといって、互いの考えていることが分かるというものでもない」「必要なのは相手の意を汲む努力をすること」。当時はこの意味がわからなかったのですが、今ならわかります。

例え翻訳ツールで正確な文章が作れても、相手の知識や求めを踏まえて伝える努力をしないと、伝わらない。今後もそれを忘れずにコミュニケーションしていきたいです。

*『十二国記』小野不由美／新潮社

モロッコから有馬へ。

それは言葉を通じて「私」を知る旅

#学びのキッカケ

「芸者とTOKYO」日本の魅力や不思議に惹かれて、19歳で留学。

#変化・気づき

正確さより、アイデアを伝えたい気持ちを優先したら伝わるように。

#楽しさ・喜び

言語を通じてその国の文化に触れ、新たな自分らしさを獲得する。

ブランドディレクター 有馬温泉 御所別荘
らみや
金井良宮さん

1999年来日。スキンケアの海外戦略、商品企画等を経て、2011年に有馬温泉最古の宿、御所坊のブランドマネージャー兼若女将に。現在は系列旅館の御所別荘でブランドディレクター兼女将を担う。

「いいです」は「要らないです」?

北アフリカ・モロッコで生まれ、19歳のときに日本に留学しました。土地や資源も少ないのに、経済大国の日本。芸者や侍、忍者といった伝統的な文化がある一方で、東京などの都市は現代的で洗練されているのに興味をもちました。留学して最初の1年は大阪で日本語や日本文化を学び、その後、神戸大学工学部に入学しました。留学生の私に話しかけてくれる人はほとん

どおらず、同じ学部の女性たちに「友達になりませんか」と手紙を書いていったのを覚えています。もともと学んでいた英語も使いながら交流し、仲良くなりました。

日本語は難しいです。単語の意味がわかっても、その時々雰囲気や行間で、意味が変わる。例えば笑顔で手を振って「いいです」と言った場合、「いい」だから「OK」と思ったら、実際には真逆の「要らない」という意味だった、といったことも。だから、ひたすら周りの人を観察する日々でした。

大学で仲良くなったグループの1人に、有馬温泉最古の温泉旅館に生まれた金井一篤さんがいて、大学1年のときにみんなで有馬のお祭りに行きました。歴史の深い街ですが、有馬は街の人たちがフラットで、「日本の魅力はこういうもの」「外国人はこれが好き」と一括りにしないことに魅力を感じたのを覚えています。

のちに一篤さんと結婚。東京の企業で働いた後、フランスの大学でMBA資格を得て、有馬温泉で働くようになりました。

伝えたいことがあるのに 我慢しては「申し訳ない」

東京の企業に勤めたときも、有馬温泉で義父



海外に向けて、有馬の歴史や文化を発信することも。写真は2016年、イタリアで行われたスローフードの世界大会での様子(本人提供)。

の通訳をしたときも、私は歯がゆさを感じていました。「外」から来た私には、長く同じ場所にいる人とは異なる視点から、そこにあるものの良さが見えることがあります。それで何かアイデアを思いついても、日本語が上手ではないので伝えられないのです。「せっかく私の中に生まれて、外に出ていこうとしているのに、言葉のせいで私の中に閉じ込めてしまうのはアイデアに申し訳ない」。そんな葛藤がある日爆発し、積極的に相手に喋るように。すると、言葉は拙くても思いは伝わったのです。大事なものはメッセージなのだと感じました。

幼少期に習得した言語を通じて、自分の国や文化の中で「私」というものを捉えていたけれど、英語を学ぶことによって自由を獲得し、自分の意見を主張するようになりました。そして日本語を通じて、相手を敬う姿勢や、はっきり表に出ない感情を読み取ろうとする思いやりを知った。言語を学ぶとは、自分のアイデンティティを拡張すること。「これが私」と思っていたものが、別の価値観や文化と巡り合ってどんどん広がっていく。他の言葉を獲得する道のりは、同時に「私」を知る旅だったのでしょう。

「リスぺクト」は国境を越える
全力で戦ってこそ生まれる絆。

©2023 Riot Games, Inc. Used With Permission

#学びのキッカケ

洋楽が好き。またゲームに関して英語による情報が多かったから。

#変化・気づき

国際大会で海外チームのコーチと雑談し、情報を得られるように。

#楽しさ・喜び

憧れの選手やコーチと交流し、リスぺクトの気持ちを伝えられる。

eスポーツ コーチ ZETA DIVISION
XQQさん

選手として活躍後、21歳で専任コーチに転身。日本のeスポーツ界ではゲーミングコーチのパイオニア的存在で多くの支持を集める。所属するZETA DIVISIONではヘッドコーチを務め、チームを世界大会に導く。

ゲームで勝つには 英語でも情報を得なければ

近年は、職業としてeスポーツ選手(プログラマー)を選択する人も増えています。私も18歳からプロの世界に飛び込み、数々の世界大会に出場してきました。世界との差を考えて、専門職としてのコーチが日本にも必要だと感じ、21歳でコーチに転身しました。

世界のeスポーツ市場は、北アメリカや韓国・中国がリードしています。おのずと世界に出回る

ゲーム関連の情報も、他言語が多いです。翻訳サイトやアプリを活用しながら情報収集していますが、自分に知識がないと、翻訳された情報が本当に正しいのか、判断できません。

もともと洋楽が好きで、英語への憧れもあったため、語学アプリなどを使って英語を学ぶように。ただ、ゲームを通じて会話する場合は、片言でも案外伝わるとわかりました。そもそもプレイヤーには英語が第一言語ではない人も多く、ゲームでよく使う単語や言い回しを覚えてしまえば、文法はめちゃくちゃでも通じるのです。

取材・文 / 塚田智恵美

むしろ英語を学ぶ過程で衝撃だったのは、世界大会に出場したとき、会場近くのカフェに行つて「テイクアウト」が通じなかったこと。英語圏では持ち帰りしたいとき「トゥーゴー」が一般的なんです。海外遠征で、現地の人と直に触れ合うことで実践的な知識を得ていきました。

憧れの人とは自分の言葉で 直に熱量を交換したい

先日も、世界大会に出場するために韓国に行きました。eスポーツは情報戦の面も大きく、他国の選手やコーチと交わした何気ない会話から、ゲームにまつわる最新情報やその国ならではの戦い方を知って、チームの戦略に生かすこともあります。かしまらない雑談を通じて得られる情報は意外と多く、コーチとして英語を学んだことはプラスだったと思います。

ただ、言葉を通じて交換するのは、情報だけではありません。eスポーツの国際大会では、試合のあと相手チームの選手やコーチに自ら話しかけに行く人たちの姿を見かけます。時には、憧れの選手とユニフォームを交換する場面も。サッカーや野球の国際大会と同じで、真剣に戦うからこそ相手をリスペクトする気持ちが生まれる。

強い選手と話せたら嬉しいし、やる気も出る。情報交換に限るなら、精度が高ければ翻訳でもいい。でも熱量の交換は、自分の言葉でできたら嬉しいじゃないですか。

フィジカルスポーツと同じように、ゲームも、真剣に取り組むことでさまざまなことを学べるものです。スポーツマンシップや戦略的思考…。その一つに、私の場合は「英語」があったのだと思います。いつか日本が、eスポーツで圧倒的な力をもつ日が訪れて「日本語を学ばないと最新の情報に追いつけないな!」とも言われてみたいですね。



2023年5月に世界大会に出場したときの1シーン。チームをまとめ上げながらも、他国のチームの戦い方を見て、俯瞰して戦略を立てる。

#学びのキッカケ

大学時代、消去法でなんとなく中国語を専攻。

#変化・気づき

いろんな人とつながり、自分の世界が拡大。仕事にも役立った。

#楽しさ・喜び

苦手を克服したことで自信が付き、積極性が増した。

中国語との出会いは
自分の新たな一面を知る機会・勇気に

公務員 大分県庁
佐田彩歌さん

愛媛大学の学生時代に中国語と出会う。中国文学のゼミに所属し、中国留学も経験。2021年4月に大分県庁に入庁し、約2年間、観光誘致促進室の事務職員として東アジアを担当。現在は地域創生部主事。

「英語がダメなら中国語!」 中国の魅力を知り夢中に

高校時代から「海外に行ってみたい、海外の人と交流したい」という思いがありました。でも、英語は苦手で、成績も下のほう。なので大学進学後、「英語がダメなら中国語かな」という安易な考えで、話者人口の多い中国語を第2外国語として選択し、学び始めたんです。

中国文学のゼミに入ったことで、中国人留学生と知り合う機会にも恵まれました。彼らと話し

てみたらめっちゃ楽しくて、「こんなに面白い国があるんだ!」と中国への興味が大きくなり、中国語の勉強にも熱が入りました。勉強方法は、留学生とおしゃべりしたり、中国のドラマやネット動画を見たり。趣味の延長のように、自分のペースで勉強することが私には合うようです。

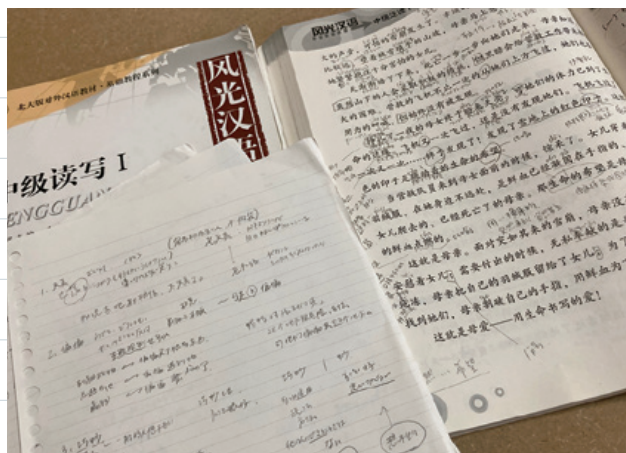
大学3年生のとき、中国留学にも踏み切りました。それには当時目指していた教職課程の履修を諦める必要がありましたが、中国への好奇心と、想像がつかない世界に飛び込んでみたい気持ち強く、留学のほうを選びました。

現地を生で感じ、ますます中国が好きに。どこが好きかというと、整然としていないごちゃごちゃ感と、あふれるエネルギーでしょうか。最初は「えっ」と驚くこともありますが、その雑さが心地良いんです。私は周りの目を気にしてしまうタイプですが、中国には多少のことでは動じない自分をもつ方ばかり。私もやりたいことをしていいんだ!と思えます。

仕事相手との関係性が言語力によって親密に

こうして中国語を学んだ経験は、仕事にも活かしています。

私は県庁に入庁して約2年間、観光誘致促



中国留学中に中国語の授業で使っていたテキストには書き込みがたくさん(写真は本人提供)。

進室で東アジアを担当し、中国や韓国の旅行会社、メディアに向けて観光客誘致を働きかける仕事をしました。海外の方とのやりとりでは、先方の担当者が日本語を話せることがほとんどであるため、こちらは先方の言語が話せなくても問題ありません。ただ、少しでも言葉を話せると、先方の心の開き方が違うと感じます。

仕事の話が終わったあと、なるべく個人的に先方の言語で話しかけ、趣味の話をしたり、相手の国が好きだという気持ちや好きになったきっかけを伝えたりしていました。すると、親密さが生まれ、その後も気軽に情報交換や相談がしやすくなります。そんな関係性が築けたのも、言葉というコミュニケーション手段をもっていたからこそでしょう。

改めて振り返ってみると、苦手意識のあった外国語のなかに好きな言語ができ、勉強すれば上達できると知ったことは、大きな自信になりました。だからこそ留学を決断でき、そこでの経験が仕事にも活かしたし、これからのキャリアの広がりにもつながると思います。私にとって他言語は、世界を広げる手段。日本語だけの中に閉じこもっていたら絶対得られなかった世界を、今、楽しんでいます。